

パспа文字の原初字母表とその発展

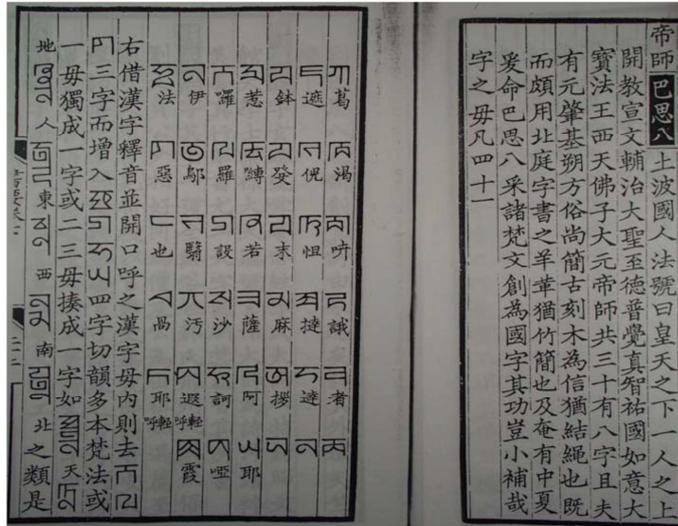
中村雅之

1. 現存の字母表

現在に伝わるパспа文字の元代～明初の字母表として、次の2種が知られている。

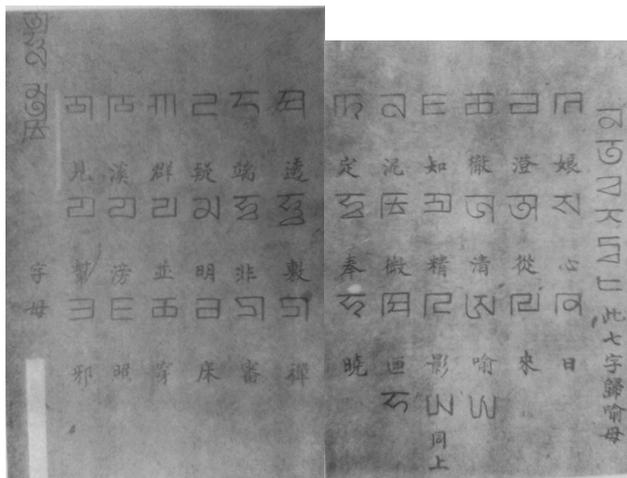
- a. 『書史会要』および『法書考』所載の字母表
- b. 『蒙古字韻』所載の字母表

字母表 a は 41 種の字母を右から左への縦書きで配列し、音訳漢字を伴っている。字母表に続く説明では、漢字音の表記の際には 3 字母を除き、別に 4 字母を加えるとする¹。



(上海書店 1984 年版『書史会要』巻7の字母表)

字母表 b は伝統的な 36 字母に対応させた 35 種の字母²と母音を表す字母 7 種の計 42 字母を左から右への横書きで記す。



(『蒙古字韻』所載の字母表)

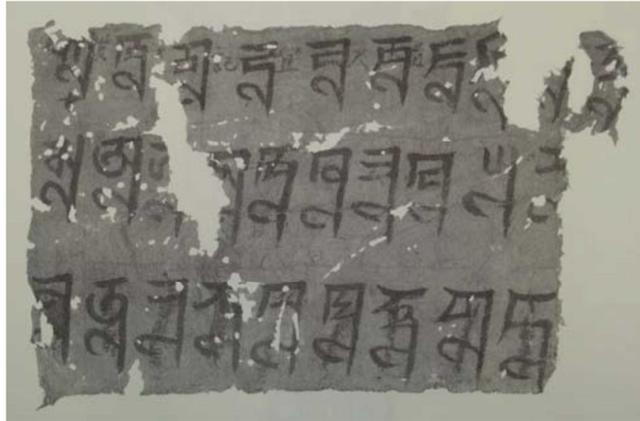
¹ 字形に不正確な部分もあるが、おそらく除かれる3字母は「r」「q」「h」、加える4字母は「f2」「s2」「h1」「y2」である。なお、パспа文字のローマ字転写は吉池孝一(2015)の脚注1の方式による。

² 匣影喻に各々2種の字母をあてるのでプラス3、照穿床と知徹澄の字母がそれぞれ完全に重複しているのでマイナス3、そして非敷奉の3母に対して2種の字母しかないのでマイナス1、結局35種になる

この2種の字母表はその要素も配列も全く異なるが、ともに今はなき原初字母表の特徴を部分的に受け継いだものと考えられる(cf.中村雅之 2008)。原初字母表は、字母の要素と順序は『書史会要』の字母表 a と同じであり、その配列は『蒙古字韻』の字母表 b と同じく左から右への横書きであった。その想定に裏付けを与えるのがハラホト出土のパスパ文字の写本断片である。

2. ハラホト出土の字母練習帳

吉田順一&チメドドルジ(2008)に収められたパスパ文字文書(No.086)はほんの僅かな断片であるが、パスパ文字の原初字母表の姿を知るための最重要の資料である。



おそらくはパスパ文字の表記法に慣れるための字母練習帳と言うべきものであろうが、最も目を引くのはその配列である。右側が3分の1ほど欠けているものの、字母の要素と順序は『書史会要』の字母表 a とほぼ同じである。しかしながらその配列は、通常のパスパ文字の配列(=左から右への縦書き)とは異なり、左から右への横書きになっている。この配列は『蒙古字韻』の字母表 b と同じである。

この小さな断片こそがチベット文字の配列に影響された原初字母表の配列を忠実になぞったものなのであろう。字母表 a は基本字母 41 種をもとの順序で記すが、漢文の書物に引用されたため、配列は右からの縦書きになった。字母表 b は漢語表記に適用されるべき 42 種の字母を 36 字母の順序で記すが、その配列は原初字母表に従って左からの横書きになった。

ところで、この字母練習帳では、基本字母に全て母音 i を付した形で書かれているが、いかにもパスパ文字に不慣れな者の書写と見えて、実際にはあり得ない綴りが出てくる。第3段は左から「i」「u」「e」「o」であるが、それらの字母にまで母音 i を付して「ii」「ui」「ei」「oi」となっているのは、この写本の書き手がパスパ文字の素人であることを如実に示す。しかしそれ故に字母の選択や配列に作為のないことが期待できるわけである。

3. 『蒙古字韻』所載の篆字母表

やや風変わりな第4の字母表として『蒙古字韻』に収められた篆字母表を挙げるができる。その支離滅裂な配列の特徴は吉池孝一(2009a)に詳しい。要するに、字母表 b の 36 字母表を、その配列(左からの横書き)を無視して、強引に(むしろ無意識に)左からの縦書きとして読んだ配列になっている。左縦書きは『蒙古字韻』を含むパスパ文字資料の一般的な配列であるから、この処置はある意味では自然なものと言えるのであるが、伝統的な 36 字母の配置に留意しておらず、吉池氏の指摘するように漢語音韻学の知識をもたない者のなせる業である。しかしこのお粗末な篆字

母表にもいくつかの重要な情報が見出される。



吉池氏は原初字母表に篆書体を付した「原篆字母表」を想定し、『蒙古字韻』の篆字母表はそれを材料として字母表 b のような 36 字母表に（誤った配列で）配したものという。字母表 b に直接篆書体を加えたものでないことは、次の 2 点からわかる。まず、字母表 b には存在しない「h (visarga)」を含んでいること。そして「e」「k」の楷書体の字形が字母表 b と異なることである。

字形に関して言えば、この篆字母表にはハラホト出土の断片と共通した特徴があることも注目される。例えば、「h (visarga)」の字形は『書史会要』の字母表 a よりハラホト文書に近い。また「v」が誤って「k'」になっているが、ハラホト文書の字形もやや似ている。

細部にわたるが、原初字母表の最後の 3 文字が「i」「ü」「e」の順序であったか「e」「ü」「i」かという問題がある。『書史会要』の字母表 a では前者である。しかしハラホト文書では「h (visarga)」の後に「e」が見えており、後者の順序であったと思われる。『蒙古字韻』の字母表 b でも後者の順序である。篆字母表では「ü」の前に「e」があるように見えるが、楷書体の「i」が確認できないため決定的なことは言えない。

参考文献：

- 吉田順一&チメドルジ編 2008. 『ハラホト出土モンゴル文書の研究』, 東京: 雄山閣.
中村雅之 2008. 「パスパ文字の字母表について」, 『KOTONOHA』 73.
吉池孝一 2009a. 「蒙古字韻の篆字母表について」, 『KOTONOHA』 82.
吉池孝一 2009b. 「『書史会要』八思巴字字母表 —音注悪と梵文 visarga—」 『KOTONOHA』 84.
吉池孝一 2015. 「八思巴字官印集釈—『隋唐以来官印集存』の管軍下千戸所印—」, 『KOTONOHA』152.